

お座主の団扇



平成九年五月二十九日に、延暦寺根本中堂で挙げられた、第二百五十五世天台宗座主の伝燈相承式の引き出物に、お座主直筆の色紙を頂いた。金箔の地に「洗心」と書かれてあった。実に爽やかな言葉だと感じた。夫は早速丸額に納めて玄関に飾った。

七月八日には、父の建てた信州霧ヶ峰の昭和寺で恒例の全戦没者慰霊祭を父の一周忌も兼ねて行う手筈で、お座主が大導師をお勤め下さることになっていた。その記念品に何かと思っていたところだったので、お座主のあの色紙で団扇を作ったら喜ばれるのではないかと思いついた。

以前の慰霊祭に父の紺地金泥の般若心経の団扇を配った事があって、それがとてもよかったことが記憶にあった。「洗心」とは涼しげな言葉でもある。諏訪でお祭りの用品を製造販売している宝屋の会長

岩波さんは、私どもの世界平和同願会の理事でもあり、確か以前の団扇は彼が作ったような話をしていた記憶があった。一本どのくらいの費用で作れるのだろう。

岩波さんに電話で聞くと、どうやら百本作っても予算以内に収まりそうである。作ると言っても、先ずはお許しを願わねばならない。あと一カ月程しか余裕がないことである。手紙では遅れてしまいそうな気がした。と言ってお座主にお電話するのモドキドキしてしまう。私は上方弁が苦手であり、聞き取れないこともあったので、失礼があつてはと、この際FAXでお願ひすることにした。

早速ワープロでお願いの筋を書いた。活字も大きめにして。翌朝、気後れに笞打ってお座主のお宅の円乗院にFAXする。翌日の晩お座主からお電話があつた。

「団扇にするならまた書いて送ってもいいが」

とおっしゃる。私は只々恐縮して、

「あれで十分でございます。どうもありがとうございます」

と胸を撫でおろした。そして善は急げと早速現任職の三男大圓に連絡したのだった。

ところがである。十日ほど経つてもう順調に進んでいるとばかり思っていた頃、大圓から連絡があった。

「あの色紙の地は金色なので、印刷するのに版が取れないのだそうです」

白地でない駄目だから、新しく書いてもらえないだろうか、と言うのである。何ということか。それならあの時、よろしくお願いしますと言えばよかった。大圓も自分でお願いすればよいのにと齒がゆく思いながら、私はまたまた小さくなってお願いする羽目になった。その上今度は、急いでお送り頂かねばならない。岩波さんに問い合わせると、少なくとも二週間くらい前には戴きたいとのことである。緊張で胸が痛くなるような思いでまたワープロに向かった。見積もりの時、実物を持参すればよかった筈だった。信州と鹿児島との距離もつらめしい。目を瞑ってFAXする。

四五日して大圓から新たな色紙をお送り戴いたと

電話があつた時は、もう私は涙ぐんでいた。大体、信州の名も知れない父の寺の法要に、日本の仏教界の最高峰であられる比叡山のお座主がお出まし下さること自体が、前例のない文字通り有り難いことなのである。

七月五日昼、夫と私は鹿児島空港を発つ。小金井に住む次男から車を借りて、夜七時には上諏訪に着き、町にある事務所泊まる。翌朝は、七日夜行つ理事会後の懇親会、法要当日の食料品等の買い物、届け物の注文などメモを片手に走り回る。霧ヶ峰は山の上で、一切は下で買い整えねばならない。昼食をとる間もなく、パツクの弁当を買つて霧ヶ峰に登つた。なつかしい食堂で遅い昼食をとり、すぐまた大圓の指示で準備にとりかかる。

七日、空模様のはつきりしない中、四時頃にお座主がお付きの若い僧と到着され、宿所の東山荘で一休みなさる。本当に遠路をよくいらして下さつた。大圓にはお土産にお経を入れる錦の袋など下さつて、お心にかけて頂いていることを感謝するばかりである。

夕方になって、理事会に出席の岩波さんが待望の団扇を運んで来た。思ったより小振りの五角形のものだったが、墨痕鮮やかな品のよい素朴な団扇である。理事の一員であり、大圓の後ろ楯として法要の一切の面倒を見て下さっている、善光寺寿量院の小山健英師が驚いて目を剥かれて、

「お座主の色紙を団扇にするなどとは何と勿体ないこと。団扇はこう捧げ持つて、首の方を動かさないと」

と言われた。このユーモアのある有り難さの表現は素晴らしいと思った。確かにその位の有り難い団扇なのだろう。まさにこの団扇は私の無知の産物と言える。

理事会は六時から始まって、一時間ほどで懇親会お手伝いの義妹や友達、お座主のお付きに運転手も加わって、ささやかながら和やかな一時であった。会が終わわり、それぞれお宿に戻られたり、お泊まりの方が休まれた後、大圓と、法要後にお配りする袋に、特注のかるかん饅頭とお座主の団扇を一枚ずつ入れた。

八日の法要は生憎の雨となった。例年法要に先立つて行われる、諏訪神社の神官による伊勢、諏訪、御射山三社の神事も本堂との通路で行わねばならなかった。雨の山は冷えこんで寒い。しかし肅然としたお式となった。

地元の長円寺の御詠歌奉納、坂口恵美子さんの琴演奏の奉納、記念撮影の後に昼食。はるばる長野からマイクロバスで駆けつけて下さった善光寺御詠歌講の御詠歌奉納

のあと、いよいよ大導師お座主による法要である。式衆は善光寺より四名、教区代表の方と大圓が勤める。定刻に入堂される正装のお坊さん方の中に、赤い衣を纏った大圓



を見て思わず目頭が熱くなった。父が見たらどんなに喜んだことだろう。

鹿見島に戻り、宅急便で送った荷物の中の団扇を取り出した。首ならぬ団扇を動かしてゆったり扇ぐ。その涼しい風はまさに心が洗われる思いがするのだ。

(平成9年7月)

